□シンポジウム Symposium

アメリカの報道写真

講演者：石川文洋（写真家）
　　：生井英考（共立女子大学）
　　：服部孝章（立教大学）
司会：三浦雅弘（立教大学）
日時：2003 年 12 月 20 日（土）15:00-18:00
会場：立教大学池袋キャンパス 8 号館 8202 教室

立教大学アメリカ研究所は、2003 年 12 月 20 日に「アメリカの報道写真？キャパ・ヴェトナム・9.11」と題した公開シンポジウムを開催した。20 世紀のアメリカ社会を様々な側面から切り取り世界に伝えたロバート・キャパを始めとする写真家集団マグナム、アメリカ社会がメディアを通して戦場を体験したヴェトナム戦争、そして、今なお記憶に新しい 2001 年 9 月 11 日の同時多発テロ事件、さらには、それ以後におけるアメリカの戦争報道？これらを題材としたこのシンポジウムでは、従軍記者としてヴェトナム戦争を経験し、現在はフォト・ジャーナリストとして活躍する写真家の石川文洋氏、ヴェトナム戦争の文化表象をめぐる著作をあらわし、主に映像史とアメリカ研究を専門とされる生井英考氏、そして放送制度やマスメディア法、さらには人権と報道をめぐる諸問題の研究をされている服部孝章氏のそれぞれによる講演、ならびに、三氏による議論が展開された。

カメラマンの石川文洋氏は、ヴェトナム報道と他の戦争報道の大きな違いとして、ヴェトナムではジャーナリストが最前線まで行き、かつ現地に長期滞在していたことを挙げ、また、そこで出会った様々な戦場カメラマンの報道に対する取り組み方や、「ヴェトナム戦争はアメリカの侵略である」というヴェトナム戦争観を披露した。そして現在と当時のフォト・ジャーナリズムを比較することで、昨今の写真週刊誌が抱えている問題点を指摘するとともに、写真のもつ「記録性」という価値を強調された。

生井英考氏は、2001 年 9 月 11 日以後の WTC を撮影した美術写真家ジョエル・マイェロウィッツ（Joel Meyerowitz）の写真を紹介しながら、美術写真プロジェクトがプロパガンダの一翼を担いうるひとつの形態を示しただけでなく、それらの写真が「美的」なるものとして観る者を現実から遠ざけるという作用にも言及した。また、今の記憶を歴史として後の世代に残していかなければならず、その非常に強力な道具･装置として写真が機能しうると指摘した。そして最後に9.11後の大衆文化の動向にも触れ、その多様な表出が記憶と歴史とを織り

なし、そこに写真を始めとする映像が組み込まれて特定の意味を構成してゆくと論じた。

服部孝章氏は、報道写真・映像の歴史的変遷をたどりながら、現在はジャーナリズムが戦争とは相即不離の関係にあり、開戦と同時にメディアは戦争の中に組み込まれている、と指摘した。また、90 年代にビル・ゲイツが 6500 万枚の写真を買い取り、文化遺産を独り占めにしたという商業主義の影を紹介し、報道写真と著作権という問題に対して正面から向き合う必要性を訴え、今後写真をいかにして残していくのか、という問題を提起した。

会場には、フォト・ジャーナリストの広河隆一氏の姿もあった。2004 年 3 月 20 日に創刊されたフォト・ジャーナリズム雑誌、『DAYS JAPAN』の責任編集を務めている広河氏は、「戦争」という言葉はまやかしであり、実際は爆弾を落とす側とその下にいる民衆の側という構図がほとんどで、二つの軍隊が対等にぶつかり合うような戦争には出会ったことがない、と過去の「戦争」を振り返った。ところがメディアが取り上げるのは、もっぱら戦争を仕掛ける側にとって快い写真であって、民衆＝被害者の写真や映像はほとんど外に現れないという問題を指摘された。

三氏による講演後は、立教大学アメリカ研究所の三浦雅弘所長が司会を務め、討論と質疑応答が行われた。質疑応答では、イラク戦争に対する考えや、写真を撮る側と撮られる側の関係などについて、活発な議論が交わされた。

当日は、学内外からの学生を中心に教員、研究者など約 230 名の参加者を得て、会場は熱気に包まれた。この場を借りて、講演者および参加者の方々に感謝の意を表したい。